

## 「記録と記憶」

崔吉城

### <植民地時代は暗黒期>

私の日本留学は私の人人生において突発な出来事であった。その張本国である日本については何にも知らなかった。朝鮮神宮の残骸として残っていた階段で遊び、日本人住宅であった畳部屋で暮らし、銭湯に通いながらも日本植民地時代を思ったことは一度もなかった。学校教育でも日本植民地が言われたことは一度もなかった。植民地時代は暗黒期ではなく、ただ存在していなかった。日本語ができ留学し、帰国して日本学科の教員となった。韓国の反日感情とぶつかった。それは日本植民地史からのことであると真正面から植民地を研究し始めた。それを講義に持ち込む場を持たず植民地に関する読書会と研究を10年以上行った。そして現地調査も伴った。日帝時代を経験した人はどこでも多くいた。彼らから証言を集めた。しかし証言の正確性に疑念を持っているので記録されたものと照合させの作業もした。物証主義により証言は常に疑念されることがある。

植民地時代を経験した老年層からの証言ではその時期がよかったという意見が圧倒的に多かった。経験していない青壮年層ではこぶこぶであったが、小学生においては日本が嫌と敵対視する意見が圧倒的であった。植民地を経験していない、特に戦後の教育を受けた世代に反日感情が強いことを知った。それと旧宗主国への反感、特に日本に対する反感を強く持つ国は韓国であることを結論的に知ることができた。

### <証言から映像へ>

私の子供の時は日本植民地の遺物、遺産が多くあった。証言できる人も多かった。現地調査と記録資料調査を兼ねて行った。当時韓国経済事情もよくなり、日帝時代を懐かしく思う人がいた。ただ証言は過去の記憶に基づいて、語る時の状況によって演出される話術の一つであろうと思う。私の幼年期や子供の時は戦争末期、朝鮮戦争で悲惨な廢虚ばかりのイメージがある。しかし日帝時代に遡っては悪いイメージを持っていない。特に中高の6年間学校の近くには総督官邸、3年間総督府庁舎であった中央庁に出入り、総督府付属博物館であった文化財管理局での仕事などをしていて、知らず植民地時代の雰囲気か身についていたかもしれない。当時韓国の事情がよくなかったことが植民地へのよいイメージとされたようである。

暗黒期か存在しない日帝植民地史を遡りながら調査をしているうちに私が知っている戦後史より存在感が強くなっていった。それは記事などドキュメント文書から画像へ、さらに動画の映像・映画へという資料の質によるものである。

日帝時代が残した映像や映画を見ることがあった。多くはプロパガンダ的なものであったが、中にはその時代の生活ふりを覗いてみることもできた。同時期において国策映画やプロパガンダ映画が多く作られて多くの人が影響された。それは今CMに影響されるのと似ている。しかし多くの人はそのような脈絡とは関係なく、映像を作り残している。

植民地の京城での生活、花見の盛り、喫茶店やバーなどでコーヒーやビールを飲み、ファッションの通りなど人間が生きている動画には私はショックを大きくうけた。映像を通して植民地研究をすると決心し、植民地期の映像に関心を持つようになった。

特にヴィジュアルフォークロアの北村皆雄氏から貴重な 1936 年映像記録の「朝鮮多島海探訪記」「蔚山達里農楽」を見せてもらったのは 1980 年代半ばであった。この映像は当時盛んに作られた国策映画とは違って、当時の民俗学や人類学の映像として新鮮さがある。韓国の戦前の記録映像の唯一のものである。当時の民俗を総合的に考察する上で刺激的なものである。また宮本記念財団を訪問して調査報告書や写真なども見せていただいて刺激を大きく受けた。

人の眼は意図的に一部だけを見ているが、カメラは撮影者が意識しない部分も記録する。眼で見たものとカメラで見たものが混ざり合って、意識、無意識には関係なく実観的なものになる。また調査報告書や写真などもあり、当時の民俗を総合的に考察する上で刺激的なものである。

#### <宮本馨太郎映像から見る農村>

無声、白黒の映像を分析する時停止画面として見ることが多い。しかしそれは注意すべきであろう。なぜなら動的な場面をよく映している映像の特徴を無視することであるからである。映像は写真集ではない。映像の動きの一部の画像を写真と思われがちである。動きを中心に見るべきである。夏季の農村の労働場面、特に麦の収穫の動的画面で木の槌竿で脱穀するのが八回の頻度、「洗濯の画面」が五回、「風に穀殻を飛ばす」以外にも女子がつるべで水を汲む、新作路の内側で街路樹の靡き、男女性別によって女性が豆の種まき、種まきから脱穀まで農業の過程が表れている。洗濯物の干し方、女子が河川で洗濯している場面がよく出る。髪を洗い、櫛で髪を梳かす若い女子、下半身裸の子供がいる。洗濯の場面が五回、「壺を頭に載せた女性」が三回など、行動のリズムに注目して繰り返して撮影した。インフォーマントから話を聞くことが現地調査で最も重要なことであっても、「舌筆で表現し難いこと」を記録保存するのに映像は最も適しているであろう。特にリズムカルな脱穀過程は繰り返して撮っており、映像の利点を生かして動きや動作を中心に撮っている。

農業、農家、農機具、農耕儀礼が注目されて写っている。「達里」の農旗が見

える。銅鑼、小鼓(二コ)、十五人が入り乱れて踊る。蔚山市場の風景が映っている。井戸、原野、畑、街路樹、屋根、木橋、現代式建物、電信柱と電線、自転車などが見える。黒笠を被った老人、穴をあける工人、ゴザを運ぶ自転車、洋装した人、和風で下駄を履いた女子、タバコを吸う老女、穀物、紙傘、唐辛子、キセル、下駄、筵席、人形、おもちゃなどの商人、傘の修理、頭にはちまきをした人、ゴム靴や傘と靴の修理人などがうつっている。労働の時より食べる時に男女性別がはっきりしている。農作業が終わって夕食は男性中心の筵席の上で宴会が開かれる。黒色のゴム靴を筵の端の外側に脱いでおいてある。肩掛けベルトの青年は日本帰り客か調査員の一人であろう。酒甕からどぶろくが回される。乾いた干し明太が主なつまみである。

民俗を記録保存しようという意図で撮ったようである。ほとんど村の全景から始まって民具そして使用法、農業活動、農楽、結婚式などへの順で全景から細部に主に動く場面などを撮っている。ひとつのプロセスをかなりきちんと撮っている。結婚式が終って花嫁が虎皮で覆われた御輿(カマ)に乗って新郎家へいく行列が映っている。結婚式の場面は撮影されていない。花嫁は結婚式の礼服である円衫を着て簇頭里を被った。行列に日傘をさして行く女性、頭に物を載せて歩く人もいる。礼段を頭に載せた女性であろう。ヘアスタイルから未婚の女性であると思われる。この映像には「達里」「達里農楽」という地名が出ている。特に当時の農楽を映像にして残したのは特記すべきである。その踊りがフィナーレになっている。その映像を通して1930年代の生活様相がよく映し出されている。20人ほど農民が集まっている。白地に赤い縁取りをつけ「達里農旗」と墨書した農旗も出ており、長い朝鮮ラッパが盛んに吹き鳴らされる。中庭すなわち[マダン]の中央に農旗を立てて、その周国で踊る。酒食が出され騒ぎは夜半まで続く。有力な農家の除草が終るごとに、連日これがくり返されるのであって、これは稲作の豊年を祈るものだといわれている。

停止画面から多くの民俗を知ることができる。未婚の男女は三つ編みで背中に垂らすのが常である。一般的に髪を結いあげるので結婚式を「髪上げ式」ともいう。洋服を着た親族代表のような男性、白い外套で中折帽の男性が歩く。結婚式は伝統的に行われていることがわかる。

#### < 渋沢敬三「朝鮮多島海探訪」映像から見る島生活 >

この映像は1936年8月17日から2泊3日の日程で渋沢敬三が代表で構成された人類学者たちが現地調査を行い、撮影したものである。多島海探訪にはエ

---

<sup>1</sup>宮本馨太郎「朝鮮半島に於ける白衣常用の風習の起源理由に関する従来諸説」『立教大学史学同好会会報』第四卷第二号、立教大学史学同好会、昭和九年。『日本の民具』第四巻、慶友社、一九六七

ティックミュージウムのメンバー、渋沢敬三、秋葉隆、桜田勝徳、宮本馨太郎、小川徹、高橋文太郎、磯貝勇の渋沢一行調査団員として団体的な総合調査である。麦の収穫など動的画面の映像で移動、普通学校の校長、下船、渡船、島の全景、農家訪問、木像、農家、喪庁、麦わら帽子、麦脱穀、わらぶきの家、仕事をすする女、屋根上のカボチャ、供物の水ご飯、ひき臼、味噌瓶置き場、洗濯、渡し船、碇、ひよこ、子供、女性、白米、海老船、ロープ、カニ、ゴム靴、干し魚、籠、ごぎ、台所、お膳、升、五戸、獣骨、豚、風を吹かせて行う脱穀、釣り、遊び、村全景、洗濯、波市、料理、伝染病で通行禁止、食べ物、果物、校長、離別パーティー、見送る人々20人余、記念撮影、労働場面、特に麦収穫の動的画面の映像「木の槌竿で脱穀」が8回の頻度、「洗濯の画面」が5回、「風で穀殻を飛ばす」のが5回、「壺を頭に載せた女性」が3回など、行動のリズムに注目して繰り返して撮影した。農作業、特に麦をたたいて脱穀する場面がリズムカルに動く場面が反復されて撮られている。

リズムカルな脱穀過程は繰り返して撮っており、映像の利点を生かして動きや動作を中心にとっている。草取りや風に麦殻を飛ばすなど区別があるが、男女共に労働する。男性たちの木の槌竿で脱穀などの労働現場が繰り返し映っている。農作業の中でも特に力仕事の打ち脱穀のテイジルという脱穀のような作業は男性に限る。チゲ（背負い籠）、わら束、麦藁帽子、熊手、麦わらを縛る過程など動きや動作を中心にプロセスを繰り返して撮っている。稲の脱穀作業は一九二九年頃から動力脱穀機が、数戸の上農の間に取り入れられるようになったが、大部分の農家はいまでも千歯すなわち〔ホルケ〕にたよっている。麦打ちはカラサオを使うのが普通であるが、今日でもなお打作庭の右に叩きつけるものがあり、ほんの少し以前には稲も同様打作庭の石に稲束を叩つけたり、あるいはコキバシを使った。

壺を頭に乘せて歩く女性など行動のリズムに注目して繰り返している。民俗を記録保存しようとする意図が伝わってくる。喪中期間に死亡者を迎える空間、裸の子供、石のすりばち、海老を捕まえる船、麦わら帽子、ロープ、下駄、ゴム靴、乾いた魚、長靴、台所、壺、井戸、豚、魚などが映っている。民俗中には波市とともに消えたものが多い。グチの群れが海流に乗って南側から北側平安道まで移動する。グチ漁船が多く集まり、海が荒れて海岸などに停泊して市が開かれる。その漁夫らを相手に売春業も行われた。画像では臨時食堂の前に女性が立っている。カメラの前では恥ずかしいから逃げたりのぞいたりする。

渋沢一行は衛生に関心を持って井戸水の質的側面を調査した。日本人は靴下を履いていて、ほとんど中折帽子を使っている。島の人々はゴム靴を履いており、概して住民の栄養状態は良い方である。風が強いところであるから、屋根を綱で縛ってある。島と島の間には潮が引くと人が往来する。調査団員らは夕方に船で

泊まって、次に他の島に行ったようである。船内では洋食、ビールを飲んでいる。

屋根にカボチャの蔓があり、鶏が屋根に登っている。渋沢は特に海老捕り漁船に関心を持っていた。船体に両側から長い翼を伸ばして安全性を保つという海老船である。が、波が高まれば危険であり、韓国政府が禁止して今は全く見られない。木浦海洋博物館が最近新しく模型を展示している。

#### <達里調査>

ここでは一つの村落や島を対象にして書き残した記録と映像を中心にその特徴を考察してみたい。調査団を作り集団的に調べる総合調査ではあり、この映像以外にスチール写真と面接調査記録、論著などが残っていて、総合的に理解することができる。調査報告書や写真などもあり、当時の民俗総合調査の方法の例として刺激的なものである。たとえば蔚山の宮本映像と小川徹の報告書<sup>2</sup>と読み合わせてみると二人とも道具や祝祭に対する関心が強く見受けられる。小川は村落、運営組織、民具、畑、屋敷、道路、境界線、祭堂、墳墓、井戸、姓氏による家屋、民家の特徴、農業、農楽などに関心があり、特に住宅図三個（塀、家の構造）に関心が高い（間取図三個）、年中行事など映像では見せきれない組織や時間的なものが分析されている。写真はまとめて載っているが、図は文章の中に載せて説明として相互補完的になっている。

報告書、写真、図、動映像が総合的に構成されている。並木が靡き、白衣の人の往来も多い。写真は動画では撮れなかったものを補充する。報告書、図、表、写真などと総合的に理解することが望ましい。動映像は農村風景、生活、農楽などリアリティーを持つが、映像だけでは地理的位置、家屋、道具、使用方法、人間の行動の類型、役割、関係など全体性、論理性などを表現するに不十分である。映像では種まきから脱穀まで農業の過程が表れている。リズムカルな脱穀過程は繰り返して撮っており、映像の利点を生かして動きや動作を中心にとっている。特に当時の農楽を映像にして残したのは特記すべきである。

論文とは違った映像の特徴が明らかになった。小川徹の報告書とともに読み合わせることができる。宮本馨太郎の映像には下線のものなど動きと動作が中心になっている。

| 小川徹の論文（1957）  | 宮本馨太郎の映像（1936）   |
|---|--|
| 村落、畑、屋敷、道路、境界線、祭堂、墳墓、井戸、姓氏による家屋） 小区、民家の特徴、住宅図 3 個（塀、家の構造） | <u>井戸</u> 、 <u>原野</u> 、 <u>畑</u> 、 <u>屋根</u> 、 <u>ポプラの樹</u> 、木橋、 <u>市場</u> 、現代式建物、電信柱と電線、 <u>自転車</u> 、下半身裸の子供、 |

<sup>2</sup>小川徹は『民族学研究』に「南朝鮮の一農村における村落生活と民具について～一九三六年八月慶尚南道蔚山邑達里調査個人報告」（一九五七）南朝鮮の一農村における村落生活と民具について」

|         |  |
|---------|--|
| 運営組織、   | 牧童, つるべ、洗濯   |
| 作業、     | 牛、脱穀、穀を飛ばす、種まき、穀物、   |
| 年中行事、農楽 | 踊り、髪を洗う、ゴム靴、どぶろく酒甕、明太<br>を食べる、農旗、  |
| 民具      | チゲ、麦藁帽子、洗濯物、新婦、外套、中折<br>帽、日傘、髪頭、洗面器、斗、バケツ、黒笠<br>の老人、穴をあける、水壺、傘と靴の修理。<br>キセル、紙傘、唐辛子、お手玉遊び、人形、<br>おもちゃ |

### <多島海調査>

一九三六年八月一七日から二泊三日間の日程で朝鮮半島多島海で調査を行なった。映像では移動のプロセスがわかる。調査団を組織して総合調査を行ったが、面接調査などは個別的にしたようである。木浦から金剛丸で出発し、鎮島の全景が見え、下船して村に入っていく、見送り、離別パーティー記念撮影などで帰路まで調査の全過程がわかる。背広を着た人々が調査団員を歓送する。黒い傘、タバコ販売所の看板、白い服を着た老人などがバックグラウンドとして映っている。船は汽笛を鳴らしながら走る。機関室、調整室、船員たち、調査員たち、船上食堂などが見える。つまり旅行記としての撮影である。

報告書には調査者が各々個人的に面接調査した内容が編集されていた。渋沢敬三の「多島海探訪記」の映像と調査報告書『朝鮮多島海旅行覚書』（アチック・ミュージアム編）があり、報告書にはスチール写真を載せている。農業、農楽、漁労、住民の生活などが表れている。その映像の順序は総じて村の表示物、村の全景そして民具を使用する方法を撮った。秋葉隆の旅行記と報告書、39枚の写真があり、相互的に考察することができる。

その写真は選定されたものとして焦点がはっきりしたものであり、漁業関係の一〇枚ほど、農業関係五一六枚、村の全景、民家、民具などである。船大工の作業動作を見せるために三枚の写真を載せている。それは映像で撮れなかったことを補充したものであろう。その他バックグラウンドたとえば人物写真から村の風景を写しものがある。しかし写真は映像の量とは比較にならない。写真と映像では説明しにくい部落の略図、民家と船の間取図などの二一個の図で示している。写真は報告書の前の部分に載っているが、図は文章の中に載せて説明として相互補完的になっている。私は韓国語の訳書に写真も読者のために関連文章の近くに載せて写真、図、映像を下記のように作ってみた。この映像は撮影者が見たことであるが、秋葉隆、桜田勝徳、村上清文、高橋文太郎、小川徹、宮本

馨太郎、磯貝勇が報告書を書いている。写真、図、映像の三つを総合的に考察すべきである。ここでは映像中心に考察する。

順序は概して村の表示物、村の全景から民具などそのまま撮った。全員 3 日間、船の上で食事も宿泊もして村では泊まらなかった。移動のプロセスが分かる。報告書と映像の内容を対照してみる。

| 『朝鮮多島海旅行覚書』            |                 | 映像「朝鮮多島海探訪記」  |
|------------------------|-----------------|---|
| 写真                     | 図(数)            | 映像  |
|                        |                 | 金剛丸に乗って出発、船の汽笛、機関室、船員、調査員、船上食堂  |
| 島全景、木像(장승)、共同井戸、渡り船、神木 | 防波堤、部落略図(4)     | 一行の移動、普通学校の校長、下船、渡船、島の全景、農家訪問、木像(장승)  |
| 少年とチゲ、農作業<br>糸車        |                 | 仕事をする女子、  |
| 家廟                     | 注連縄             | 味噌瓶、ひき臼、供物飯、小盤、いしもち、喪庁、屋根の上のかぼちゃ  |
| 洗濯、水汲み                 |                 | 砥石で研ぎ、洗濯物干し、ひよこ、綱、裸の子供、壺を頭に載せた女性、莞草を整える長靴、リュックサック、船を引き上げる、脱穀                          |
| 船舶、船玉<br>民家            | 船間取図、錨縄図、間取図(4) |   |
| 鋤の用法                   | 農具              |   |
| 船大工(3)<br><br>子供(男、女)  | 道具(3)           | イカリ、石のすりばち、海老を捕る船、麦藁帽子、注連縄、笊、筵、かま、台所、甕、馬、井戸、鋏、獣骨、豚、魚、干し魚、<br><br>ロープ、下駄、ゴム靴、コニ(고니)遊び、 |

|                    |        |                                   |
|--------------------|--------|-----------------------------------|
| 民具<br><br>男性、漁具、玩具 | 棺、死人移動 | 波市、料理、女性、子供、「通行禁止、伝染注意」食べ物、果物、生魚、 |
| 市、船と漁師、網           | 凧図     | 見送り、離別パーティー、<br>記念撮影              |

『朝鮮多島海旅行覚書』は調査者たちがそれぞれ個人的にインタビューした内容に39枚の写真を挿入編集されたものであり、相互補完的に総合して報告書になっている。写真の内訳は漁業関係の10枚ほど船大工の作業動作を見せるために3枚の写真を載せている。外に農業関係16枚、村の全景、民家、民具などである。しかし映像だけでは地理的位置、家屋、道具、使用方法、人間の行動の類型、役割、関係など全体性、論理性などが弱く、不十分である。たとえば言語、歌、身振りの画面を停止画面にして検討することで主題外の背景から重要な情報を得ることができる。したがって報告書、図、表、写真などと総合的に理解することが望ましい。ここでは一つの村落や島を対象にして書き残した記録と映像を中心にその特徴を考察してみたい。

第一、停止したものより動的な場面をよく映している。夏季の農村の労働場面、特に麦収穫の動的画面の映像「木の槌竿で脱穀」が8回の頻度、「洗濯の画面」が5回、「風に穀殻を飛ばす」のが5回、「壺を頭に載せた女性」が3回など、行動のリズムに注目して繰り返して撮影した。これで動映像が正しく利用されていると充分いえる。インフォーマントから話を聞くことが現地調査で最も重要なことはあるが「舌筆で表現し難いこと」を記録保存するにはまさに映像は適当であろう。

第二、民俗を記録保存しようという意図で撮ったようである。二人は民具を日本と比較して注目した。2人ともほとんど村の全景から始まって民具そして使用法、農業活動、農楽、結婚式などの現場、1930年代の生活民俗を撮影した唯一の作品である。そのような民俗中には今は波市など消えたものが多い。私はこの映像を見て1987年荏子島、在遠島、蝸島等に現地調査をした時、波市はすでになくなっていた。

第三、意図していないものも撮られた。その映像を通して1930年代の生活様相がよく映し出されている。山、裸の子供、中折帽、麦藁帽子にフィルムリボンを掛けたこと。ゴム靴は50、60年代まであったがいまは消えた民俗文化を見ることができる。スチール写真と動映像を同時にしたようだ。国策映画が宣伝を



中心にした点に比べてリアリティーがある。そのような点で当時の韓国事情を伝える記録映像として資料的価値がある。無声, 白黒, ズームにはならなかった。

#### <記録映像の見る方>

私は1987年映像内容を土台に予備現地調査を行い、1989年2月には北村皆雄氏と一緒に追跡調査として全羅北道の蝸島、荏子島、洛月島、台耳島、慶尚南道の方漁津などを調査した。北村氏は海老捕り漁船の海老船に、私は映像やスチール写真にも写っている波市<sup>3</sup>である。波市とはグチの群れが海流に乗って南側から北側平安道まで移動し、グチ漁船が多く集まり、海が荒れて海岸などに停泊して開かれる市を指す。

私が特にこの映像に関心があった場面は「波市」であった。私は1965年蝸島調査の時そこで波市が盛んであること、臨時の魚市の仮建物だけを見たことがある。しかしその民俗も1980年代にまだ見られたがほぼ消えたものが多く、台耳島に唯一残っている現場を訪ねたのである。西海の島嶼で波市を調査した。波市は今は完全に消えた。私は一九八五年に渋沢敬三の「多島海探訪記」の映像と『朝鮮多島海旅行覚書』（アチック・ミュージアム編）に基づいて全羅北道の蝸島、荏子島、洛月島、台耳島などを調査し、その成果を研究会などで発表してきた<sup>4</sup>。

「蔚山達里の農楽」（一九三六年宮本馨太郎作）をもって蔚山を訪ね、都市化によって激しい変化により映像の痕跡を把握することさえ難しかった。再調査を考えている中に蔚山大学校人文研究所から講演の要請を受けて研究発表のようになり、蔚山出身の高齢者を参加させた。また蔚山出身のソウル大学の李文雄氏が初めて映像を見るためにソウルから来られて参加してくれた。

私は宮本馨太郎記念財団が所蔵しているもの、私とその財団を訪問して各種の調査報告書、スチール写真、映像が残っているのを確認した。当時このような映像は民俗調査の映像は唯一なものであると紹介した。この映像は当時盛んに作られていたプロパガンダ的国策映画とは違って、当時の民俗学や人類学の視点からとった映像であることに新鮮さを感じた。これらの映像と関連する調査報告書や写真などもあり、当時の民俗を総合的に考察する上で刺激的なものである。しかしそれらはこれまで十分注目されることなく眠っていたと前置きにして、私はこの映像を見せながら停止画面をもって次のように説明をした。

まず山の峰から峰へ続く線から新作路などから村の位置を探り確認することの話をした。このような映像が日本に残った意味についても触れた。渋沢敬三先

<sup>3</sup> 吉田敬市、崔吉城

<sup>4</sup> 韓国・朝鮮文化研究会の第一一回例会（二〇〇四年二月七日、東京大学法文一号館二一六教室）で「植民地朝鮮の映像人類学・国策映画からみた民俗」を発表し、良いコメントを受けた。本稿はそれらを踏まえて作成したものである。

生の別れパティの画像に麦わら帽子のリボンが映画フィルムであることからフィルムが保存されなかった事情を語った。私はこの映像から大発見をしたと拙著『映像語る植民地朝鮮』にもそれについて書いたことである。私は戦後子供の時フィルムのリボンを巻いた帽子をかぶったことがあり、映っている画像を観察した覚えがある。それはマッコリ（どぶろく）を飲む人の麦わら帽子に捲いているリボンである。麦藁帽子にもリボンがついている。それは16ミリ映画フィルムを切ってリボンにしているものである。フリー映像作家の権藤博志氏に確認していただいた。植民地朝鮮において始まったことを力説するものである。多くの映像を作り放映したのにほぼ残っていないのは戦争による消失ではなく、このように保存しなかったことに理由がある。すくなくとも一九三〇年代には帽子のリボンに映画のフィルムを切って使われたことが証明された。

つづいて市場の風景、人の服装などの変化に触れた。新作路にポプラ並木が二〇メートルほど大きくなっている。牧童と蓑、畑に苗木植え、ポプラの街路樹が見える野原、子供を負んぶした女性、瓦の家と藁葺家、洗濯物干しの紐などが見える。道路に車が走っている。新作路、ポプラの街路樹、車などは日本植民地によって開発されたものである。これは村の祠だったようであるけれども、今、そこに老人福祉会館が建っている。

私はこの会に参加した地元の80歳ころの老人たちに意見を求めた。新作路の成長したポプラは見たことがない、ゴム靴は入っていなかった。したがってこの映像は日本が植民地を宣伝するためのねつ造の「偽作だ」と言われた。つまりこの地域の農村では豊かではなく、ゴム靴を履くほどではなかったという。市場の画像でもゴム靴が一般的であると画像を見せたら日本からそれを多く持ってきて履かせて撮った偽作の映像であろうと強く主張した。私は壇上で大変困った。そのやり取りは地方のテレビを通して全国に放映された。私は偽作を持ってきて上映した人とされ、高齢者たちの話がインタビューで流れた。

しかし当時の朝鮮農村の日常の服装は、男子は頭に帽子をかぶり、ゴム靴あるいは草鞋、上体に白の木綿や麻布の赤衫を着用し、ゴム靴をはいていた。

1910年代、20年代の衣装は真っ白であったのに、この映像では女性の上着は白く、スカートはかなり黒いものになっている。白いゴム靴、黒いゴム靴が見える<sup>5</sup>。編み笠を被った女性が農作業をしている。作業服が別にあっただけではないが一九四〇年代になると、モンペに帽子を被って農作業をするようになった。この映像ではモンペが見当たらない。女性が物を頭に載せて運んで歩く場面は日本人の目を引くようである。

姜氏は東京帝国大学農学部を卒業し、同学部の助手をしていた。郷里である蔚山邑達里においても農村社会経済調査を行う中、東大医学部の学生であった崔

<sup>5</sup> ゴムシン(靴) あるいはチブシン(草鞋)

応錫氏が姜氏の調査に同行し、社会医学的見地から生物学的調査を併行した。そこを洪沢らがそこを訪問して映像を残した実物のである。宮本馨太郎は、洪沢先生から派遣されて朝鮮蔚山達里にて民具採集や民俗調査を行った（「三十五年の学恩」）。その時、蔚山達里の農村風景、生活、農楽などを撮影した。宮本馨太郎が Attic Museum のメンバーの合同民俗査団に参加して撮影したものである。映像の「蔚山達里農楽」は記録としては保存されたが研究、特に報告書などに利用されることなく、長い間、眠っていた。

その翌日には会館に高齢者たちが集まっていたところで映像を再び検証した。その時は彼らは記憶を改めて家々の名字を確認し、その時の事情を正してくれた。その直後私はソウルで開かれた比較民俗学会の月例会に参加した。その学会には私が創立メンバーであり、顧問の有名民俗学者今は故人となった氏との昼食時間に蔚山で偽作といわれた宮本映像の話をした。彼は関心を見せながらその映像を見せてほしいという。会の時間を割愛して上映した。そして彼が演壇に立って学会への回顧談の冒頭で「この映像はやはり偽作である」と言われた。私は大いに失望した。これらの映像を撮って多く映像を残している宮本へ申し訳感もあり、私は深く考える契機ともなった。

#### <記録と記憶>

関心を持ったのはカメラは現象をどう撮るか。人の経験が記録され、記憶に残る。その記録と記憶は全く同じではなく、現象の一部が記憶される。その一部の記憶は記録と同質であろうか。この映像に関する人の記憶は限られており、一部分だけ記憶したり、記憶違いもある。生中継の画像とリプレイの画像は同じであっても同質のものではない。また人の記憶は必ずしも正しいとは言えない。経験、それはその物であり、場合によっては記憶にも残らないと言う。記録と記憶は本質が異なるのである。

製作者や撮影者は正しく客観的に撮ることが強調されているのは当然であるが、いかに良く撮ったドキュメンタリーでも見る人によって異なることを実感した。偏見を持って見れば「客観的にはならない」つまり「客観的に観るのも難しい」といえる。記録資料を編集するということはどういうことだろう。人は記録そのものをそのまま持ち続けるわけではなく、編集者のように記憶する。同じ経験をして記憶しているものは人によって異なる。それは意識と無意識、主観と客観の差であろう。

時間の流れによって過ぎ去ったものが我々に価値のあるものか。過ぎた春が繰り返しながら人間に歓喜を与えてくれるように想起され復活する力を与えてくれる。あるいは中には悪夢のように去られない記憶がある。過去を強く語るのは物的であり、生きたものは証言である。記録も確かなものであろうが記憶もそ

うである。物が静的であれば言葉は動的である。特に動画は過去を生きている状況で表現する。たとえば引揚者たちが過去の記憶を語る時悲しく、あるいは懐かしく語るかは人それぞれの状況によって異なる。同様の状況は人によって、同様な人も加齢によって異なることが常であろう。

ドキュメントとドキュメンタリーは異なる。記録資料を編集するということはどういうことだろう。人は記録そのものをそのまま持ち続けるわけではなく、編集者のように記憶する。同じ経験をしていても記憶しているものは人によって異なる。それは意識と無意識、主観と客観の差であろう。渋谷敬三グループが残した映像は国策とは無縁であり、その役割を持ったものである。ことによってカメラは現象をどう撮るか。人の「生」の経験が記録され、記憶に残る。その記録と記憶は全く同じではなく、現象の一部が記憶される。この映像に関する人の記憶は限られており、一部分だけを記憶したり、記憶違いもある。また人の記憶は必ずしも正しいとは言えない。経験、それは「生」その物であり、場合によっては記憶にも残らないと言う。記録と記憶は本質が異なるのである。